

福井県における人絹織物業の成立と絹織物業との 製品開発をめぐる競争について

— 綿・人絹交織織物の開発の過程 —

菱 谷 政 種

The realization of the rayon fiber trade and the conflict to the silk fabric trade around the development of the rayon product in Fukui prefecture.

— about the process of the development of the cotton-rayon
mixed fabric (Men-Jinken Orimono) —

Masatane HISHITANI

Since 1927, Japanese rayon industry has developed to the top at the amount of production of fiber in this industry. And the rayon industry has brought about a great consumption of rayon fiber on textile trade in Fukui prefecture. This report deals with the conflicts of the rayon fabric trade on the development of product to the silk fabric trade in Fukui prefecture. Because Fukui prefecture has been the important and the leading prefecture of the silk fabric trade in Japan. Therefore, the rayon fabric trade at the sacrifice of the silk fabric trade was absolutely impossible by the reason of the greatest obligations, loyalty and patriotism as that is the first home of “exporting Silk Habutae” of Japan. Therefore, the Fukui Industrial Laboratory tried to develop the product of the rayon fabric suitable to Fukui’s people through the tests of weaving of the various cloths by the various fibers.

In this way, the cotton-rayon mixed fabric (Men-Jinken Orimono) has been developed at last, and it has brought about a great consumption of the rayon fiber in Fukui prefecture, and also in Japan.

1. わが国人絹工業の発達と人絹糸の消費増加

日本の人絹工業は、大正15年の人絹糸輸入関税の引上げから、昭和12年の日中戦争勃発にかけての10年有余の間に、後進性を一挙に払しょくして、世界一の生産水準を達成するという、目ざましい発展を遂げた。このような日本の人絹工業の急テンポの拡大は、一体いかなる条件によって生じたのであろうか。まず国内における原糸生産高の推移を見るに、人絹糸の生産高は、昭

和8年において生糸の生産高を上回り、昭和9年には毛糸の生産高を上回った。昭和12年には大正15年（昭和1年）の実に67倍に達したのである。（第1表参照）

第1表 主要原糸生産高の推移（単位：100万ポンド）

	総数	生糸	絹紡糸	綿糸	人絹糸	毛糸	麻糸
昭和1年	1,217	75	9	1,043	5	61	23
2年	1,195	81	9	1,012	10	64	16
3年	1,196	87	10	980	16	78	23
4年	1,355	93	11	1,117	27	83	23
5年	1,270	93	12	1,009	37	58	58
6年	1,312	96	12	1,026	48	70	56
7年	1,431	91	14	1,124	69	72	57
8年	1,640	92	14	1,239	97	130	64
9年	1,836	99	14	1,388	151	116	65
10年	1,968	96	13	1,424	224	132	73
11年	2,077	93	11	1,442	279	155	90
12年	2,264	92	12	1,586	335	147	84
同 上 指 数	昭1	100	100	100	100	100	100
	2	98	108	105	96	210	72
	3	98	116	106	93	330	99
	4	111	124	117	106	543	100
	5	104	124	130	95	742	252
	6	107	128	136	97	976	245
	7	117	121	158	106	1,399	248
	8	134	123	154	117	1,959	276
	9	150	132	152	131	3,037	282
	10	161	128	146	135	4,480	316
	11	170	124	124	137	5,587	391
	12	186	122	135	150	6,719	366

（注）農林省蚕糸局編集「蚕糸業要覧」（昭和28年）繊維統計月報による。

さて第1表に見られる人絹糸生産高の急増は何に原因したものか。通説では、輸出主導型の人絹工業の発展によるものとされる⁽¹⁾。しかし人絹糸の消費は大正6年以降上昇の過程にあった。それは輸入人絹糸の消費であり、これに国内における人絹糸の生産高がプラスされてゆくのである。（第2表参照）（傍点引用者）

なおこの人絹糸の消費の増加は、つぎに示す人絹糸の用途別消費割合の変化によってもたらされたといえる⁽²⁾。（第3表参照）

第2表 日本における人絹糸消費高の推移（単位：1000ポンド）

	輸 入	生 産	合 計		輸 入	生 産	合 計
大正元年	162	—	162	大正9年	79	200	279
2年	170	—	170	10年	138	150	288
3年	175	—	175	11年	224	250	474
4年	181	—	181	12年	1,008	800	1,808
5年	42	—	42	13年	897	2,000	2,897
6年	132	—	132	14年	826	2,800	3,626
7年	77	100	177	15年	3,295	5,000	8,295
8年	75	140	215				

（注）生産は商
工省調（推定）
輸入は大蔵省調
＜出所＞「日本
紡織年鑑」昭和
4年版『産業史』
49頁より引用

第3表 人絹糸の用途別消費割合の変化（単位：％）

	大正10年	大正11年	大正12年	大正13年	大正14年	大正15年
諸 紐 類	4.0	5.0	20.0	23.0	25.0	28.0
肩 掛 類	6.0	10.0	27.0	32.0	30.0	20.0
編組紐類	80.0	70.0	30.0	20.0	15.0	15.0
綿 織 物	0.5	1.5	2.0	3.0	5.0	11.0
絹 織 物	1.0	2.5	4.0	7.0	8.0	9.0
メリヤス	0.5	2.0	4.0	5.0	7.0	7.0
毛 織 物	—	—	1.0	1.0	2.0	2.0
純 人 絹	—	—	—	—	—	1.0
雑貨その他	8.0	9.0	12.0	9.0	8.0	7.0
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

＜出所＞「帝人タイムス」昭和3年5月号

すなわち、大正10年より同15年までの6年間において、人絹糸の用途別消費は大きな変化を示す。もっとも著しい変化は、編組紐類の比重の低下と、肩掛類、諸紐類の比重の増加ならびに綿織物・絹織物との交織の増加である。つまり人絹の帯地、人絹の肩掛類の増加が人絹の消費の増加をもたらし、さらに、これに綿や絹との交織が人絹の消費を引き上げたといえる。

注（1）日本化学繊維協会編・同協会発行「日本化学繊維産業史」（以下『産業史』と略称）114頁参照

（2）前掲書49頁参照。

2. 福井県における人絹織物業の成立と絹織物業との製品開発をめぐる競争

— 福井県工業試験場の活躍を顧みて —

福井における人絹織物の製織は、まず福井県工業試験場によって開始された。『産業史』には、

次の記述がある。

「試験場は大正5年にマドラス織、同6年には人絹糸入綿織を試織して後、同10年には人絹糸応用織物（綿人絹交織）同11年には縞羽二重および人絹糸応用織物（柞蚕糸、生糸、人絹糸の交織）をそれぞれ試験的に製織した。そして同12年には人絹糸を単独で用いて、綿糸、生糸、絹紡糸、毛糸等各種の糸と交織する研究を行い、『工程上左シタル困難ヲ認メ』なかったのである。かくて、この試験場の人絹交織物の試験研究は心ある業者に大きな刺激を与えた。」⁽¹⁾

また福井県繊維工業試験場「創立70周年記念誌」によると、年次別試験研究項目の項において、つぎの記述がある。

「マドラス試織（経糸に外国製人造絹糸200d、緯糸に綿糸を使用したもので人絹交織試験の最初である。……大正5年）」⁽²⁾

「人絹糸で下記各種人絹応用織物を試織試験し、長足の進歩をとげ、生糸の領域を蚕食しつつある。羽二重、縮緬、古浜縮緬、絹人絹交織、人絹毛交織、生糸人絹交織、絹紡人絹交織、縞織物……大正12年」⁽²⁾（傍点引用者）

「支那生糸使用絹織物製織試験……大正12年」⁽²⁾

「御法川式大枠直線生糸と普通小枠揚返生糸使用による羽二重、縮緬類の比較製織試験……大正13年」⁽²⁾等。

さらに福井県工業試験場工務工程報告（大正5～12年度）によると、大正11年度の項において、次の記述がある。（当時は工業試験場と称し、昭和27年12月繊維工業試験場と改称し、現在に至っている。）

「前述ノ如ク大正十一年ニ於テ輸出織物ノ減少セシハ輸出生糸ノ売行隆昌ナルニ反シ輸出絹織物需要捗々シカラス常ニ製品ノ価格ハ原料ノ高価ナルニ随伴セズ概シテ不振ノ状況ヲ持続セリ特ニ輸出羽二重ハ微減シ絹紬モ亦一盛一衰ヲ免レザリシト雖モ後半期ヨリ採算有利トナリ更ニ十二年春期ニ入リテハ商況活躍ノ状況ヲ呈シタリ一面輸出綿織物ノ増進ハ注目ノ価値アルモノニシテ不況ヲカコチナガラ十一年中ノ総産額ハ尚一億円ヲ突破セルハ意ヲ強クスルニ足ル今ヤ染紡工業界世界的革新ノ時期ニ処シ優者ノ位置ヲ占メントスル固ヨリ難事ニハ相異ナキモ奮勵一番彼岸ニ到達スベク官民ノ協同一致コソ緊要ナリト謂フヘシ 本場微力ナガラ責メテハ如上ノ目的ノ一小部分ダニ達セン計画ノ下ニ極力試験研究ヲ怠ラサルハ事実ナリ」⁽³⁾（傍点引用者）

なお「人絹織物は、大正5年（1916）県工業試験場で試織したのがはじまりで、同9年（1920）丸岡町の戸田政吉が、内地向き婦人ショール地、コート地などを織って商品化に成功した。これらは人絹糸と生糸または絹紡糸との交織品であった。これとは別に、綿織物の産地松岡・志比堺・森田方面では、大正10年（1921）人絹糸を緯糸に応用することに成功、ついで経人絹緯綿織物にも成果をあげ、大正15年（1926）には経緯人絹織物へと進んだ。」⁽⁴⁾

「このような研究と努力によって、人絹織物は次第に発達したが、当初は、福井県は全国第一の絹織物の産地であるという自負から、絹糸まがいの織物をつくって売り出すことは、伝統を誇る福井機業家の面目を傷つけるものだとして、絹織物同業組合の大勢は、この人絹織物に対して

積極的な意欲がなく、戸田政吉は、大正11年（1922）寿駒織として組合に意匠登録し、専用証を得たという状態であった。」⁽⁴⁾（傍点引用者）

「しかし、戸田の成功後、内地向けの絹人絹交織物の分野では、目ぼしい製品が生まれないままに、福井の人絹織物の主役は綿人絹交織の分野に移って行った。もっとも、戸田以後も何人かの先駆者が絹人絹交織の新製品を開発しなかったわけではない。たとえば、大正12年には福井市の野坂鉄太郎が人絹糸を原料とした特殊織物を考案して関係方面に見本を配布し、翌13年には大野町の斎藤重雄が緯人絹の交織フランス縮緬の見本を組合に提示した。しかし、野坂の場合には、戸田の組合専用証侵害との訴えにより、生産が中止され、斎藤の場合には、組合および工業試験場を巻き込んだ侃侃諤諤^{かんかんがくかく}の議論の末に、絹織物産地としての福井の伝統を守るという大義名分から同じく本格的商品化が妨げられたのである。」⁽⁵⁾（傍点引用者）

「かくて絹人絹交織物は福井が正に絹織物の本場であることによって、その本格的展開が妨げられたが、一方大戦中から勃興し、戦後羽二重の不振に代わって活況を呈し始めた綿織物の場合には、それへの人絹糸の交織は、織物の質を高めることから、人絹糸応用についての障害が存在せず、福井の人絹織物は輸出向け綿人絹交織物として発展の糸口を見出したのである。」⁽⁵⁾（傍点引用者）

「五十年史」⁽⁶⁾によれば、「ここに漸く人絹綿交織織物の試織時代を脱却して商品化」に向かい、爾来大正15年より昭和2年に及び、これが全盛時代を出現したのである。」⁽⁷⁾

注（1） 前掲『産業史』56頁参照。

（2） 福井県繊維工業試験場「創立70周年記念誌」33～34頁参照。

（3） 福井県工業試験場「工務工程報告」大正11年度2～3頁参照。

（4） 福井市「新修福井市史Ⅱ」771頁参照。

（5） 前掲『産業史』56頁参照。

（6） 大日本織物協会「染色50年史」

（7） 前掲『産業史』58頁参照。

3. む す び

前掲福井県繊維工業試験場創立70周年記念誌によると、前田栄雄福井県繊維協会会長の「回顧」として、

「福井県の試験場は、明治以来、県内三千を超える業者の技術のメッカであった。新しい素材が市場に出回ると、業者は早速試験場を訪れて、その特性と使い方を聞いた。新鋭機械が発売されると、業者は試験場を訪れて、その機械を現実に見て、その性能や使い方を教わった。また、新しい商品開発について試験場を訪れ、その方法、分解等について詳細な相談を行なって来た。このような業界と試験場との結びつきの数十年の積み上げによって、世界に冠たる福井産地が出来上ったといっても過言ではない。」⁽¹⁾（傍点引用者）と述べている。前田氏の発言は遠く戦後の時点に立った発言であり、その点引きして考えねばならぬとしても、福井県繊維工業試験場

の役割を否定することにはならぬであろう。

本稿は、新修福井市史、日本化学繊維産業史、福井県繊維工業試験場創立70周年記念誌、福井県工業試験場工務工程報告などの文献を参考にしながら、福井県における人絹織物業の成立の過程と既存の絹織物業との製品開発をめぐる競争（相克といってもよい）の模様、並びに技術開発、製品開発の衝に当たった福井県工業試験場の活動の経過について検討を加え、絹一人絹の交織が、福井の絹織物産地としての伝統を守るという大義名分から本格的商品化が妨げられた過程—したがって綿・人絹織物の交織織物の開発の過程—を明らかにしたのである。

注（1）前掲「繊維工業試験場史」107頁参照。

＜追記＞人絹織物業の勃興については、本学紀要第21号（1991）に閑説した。参照を乞う。

（1991. 9. 7）

（平成3年9月12日受理）